

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 7月 13日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻
氏 名 菅原 大地



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Fourth World Congress on Positive Psychology (第4回国際ポジティブ心理学会)
公式ホームページURL	http://www.ippanetwork.org/wcpp2015/
開催期間	2015年6月25日～2015年6月28日
旅行期間	2015年6月23日～2015年6月29日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Lake Buena Vista, Florida, United States of America レイクブエナビスタ, フロリダ, アメリカ合衆国
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	氏名：菅原大地 所属：筑波大学人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻
発表題目 ※正式名と日本語訳	Effect of positive emotion on learned helplessness (ポジティブ感情が学習性無力感に与える影響)
補助金額	80,000円（内訳 航空費の一部に使用させていただきました）

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、申請者の国際学会への参加および発表に対して、貴学会より補助をいただき深く御礼申し上げます。自身の研究成果の発表や著名な先生方の講義を聴講するなど、貴重な経験をすることができました。以下に、申請者が参加しましたの【学会概要】と【成果】をご報告させていただきます。

【学会概要】

今回、申請者が参加した学会は、“Fourth World Congress on Positive Psychology”になります。本大会の日程は2015年6月26日～28日の3日間でしたが、6月24日にPre-congress sessionがありましたので、合計で4日間の大会参加となりました。学会の会場は、フロリダのDisney's Coronado Springs Resort内の会議場で行われました。学会会場がディズニーリゾートであることや、ポジティブ心理学に関わる方が参加されることもあってか、終始和やかな雰囲気で大会が行われました。今大会では、合計で15個ほどのシンポジウムやワークショップに参加してきました。そこでは、Fredrickson先生やSeligman先生といったポジティブ心理学の研究者の中でも著名な先生方の講義を聴講するだけでなく、直接先生方とお話しする機会が設けられるなど貴重な体験をすることができました。

【成果】

発表での成果

今回は、6月26日（金）の14:30-15:30に“Effect of positive emotion on learned helplessness（邦題：ポジティブ感情が学習性無力感に与える影響）”というタイトルでポスター発表を行ってまいりました。ポスター発表の前日に、Seligman先生が、学習性無力感の研究からポジティブ心理学の提唱までの経緯について講演されたこともあり、自分が想像していたよりも多くの方々が研究を聞きに来てくださいました。今回発表した研究は基礎的な研究であるために、「今後はどのように応用していくのか」、「介入効果はみられるのか」など、今後の発展可能性について議論しました。

その他の成果

今学会を通して、自身の発表を行うだけでなく、様々な方々と交流することができました。そのようななかで、共同研究や海外で出版されている書籍の共訳などのお話をいただきました。また、Positive psychotherapyに関するワークショップに参加したため、自身の臨床経験にも活かしていくことができると思っております。

海外での研究の動向

本学会に参加することで学んだ海外の研究の動向について、簡単にまとめさせていただきます。まず、ポスター発表の多くが様々なワークを行った介入研究であり、基礎的な研究よりも、応用的な研究が中心に行われていました。また、その対象者やワークなどは非常に多彩であり、その幅の広さには驚愕いたしました。そして、今後のポジティブ心理学の動向としては、基礎的な研究や応用研究を超えて、ポジティブな社会制度に関する取り組みが重視されていくという内容が、Fredrickson先生やSeligman先生から語られました。以上のことから、国際的にポジティブ心理学の研究や実践が盛んに行われている様子が伺え、本邦でもより一層ポジティブ心理学についての研究が行われていくことが期待されます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 25日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院人文社会系研究科
社会文化研究専攻修士課程
氏 名 岩谷 舟真



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The Joint Conference of the 11th Association of Social Psychology and 52nd Annual Convention of the Psychological Association of the Philippines 第11回アジア社会心理学会大会・第52回フィリピン心理学会合同学会
公式ホームページURL	http://www.papconvention.org/
開催期間	2015年 8月 19日 ~ 2015年 8月 22日
旅行期間	2015年 8月 19日 ~ 2015年 8月 23日 (申請書より1日短くなっています)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Philippines, Cebu City, Waterfront Hotel フィリピン・セブ・ウォーターフロントホテル
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	岩谷 舟真・村本由紀子 (東京大学大学院人文社会系研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	An experimental investigation on the antecedent conditions of pluralistic ignorance 多元的無知の先行因に関する実験的検討
補助金額	50000円(内訳 宿泊費・航空券代の一部として)

- 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

1 自身の発表を行って

“An experimental investigation on the antecedent conditions of pluralistic ignorance” というタイトルで、90分間のポスター発表を行った。発表は、多元的無知で維持されている規範から逸脱する者が持つ個人特性に焦点を当てたものであった。具体的には、①相互協調的な人物は他者からの期待に応えて行動を決める事、②相互独立的な人物は他者からの期待のみならず、自分の選好にも基づいて行動を決める事、(以上の結果より) ③相互独立的な者ほど、多元的無知で維持されている規範から逸脱しやすいことが示唆されること、をそれぞれ発表した。

ポスター発表を行った90分間のうち、そのほとんどでオーディエンスとのディスカッションを行うことができた。「実験手法が興味深い」などといった好意的なコメントもあれば、「何故、効果量が小さいのだろうか」・「仮説のこの部分の根拠は何だろうか」といった必ずしも簡単に答えられない指摘も頂いた。しかし、こうした指摘を受けて、私がなんとか返答をしつつディスカッションをしていくうちに、オーディエンスが様々な解釈を示してください、「なるほど」と学ぶことができた。

データの分析を行い、結果が得られたときにはわくわくするが、時間が経つにつれ研究の限界も見えてくる。今回の発表の場合、発表直前は研究の限界ばかりが見えているという状態で、今後はどういうふうにこの研究を発展させようかと迷っている状態であった。しかし、発表を通じて、オーディエンスからコメントを頂くうちに、結果が得られた当初のわくわくした気持ちを思い出すことができた。さらに、自分1人では気がつかなかった問題点や、また問題点を解決するための示唆を得ることができ、モチベーションを上げることができた。

2 他参加者の発表を聞いて

この度のアジア社会心理学会大会はフィリピン心理学会と合同で開催されたため、フィリピンの参加者が多かった印象である。それでも、日本からの出席者はもちろんのこと、韓国・インド・中国・インドネシアなどアジアの様々な国の人々が出席していた。そのため、会場はスーツ一色ということではなく、その国々の民族衣装が見受けられた。

こうした出席者の多様なバックグラウンドを反映してか、“文化”についての発表が多く印象である。“文化”的発表と言っても、①あるトピックの文化差を探る研究、②文化差が生じるメカニズムを探る研究、③特定の儀式などをフィールドワークで検討した研究など様々であった。

今後の研究を通じて、私は上記①～③のうち、②についての研究を進め、研究成果を発表したいと思っている。そのためにも、①のような文化差に関する知見、そして③のような、個々の文化・儀式のフィールドに参与した分厚い知見についてもキャッチアップしたいと感じた。

3 全体を通して

学会への参加を通じて、自身の英語力が不足していることを実感させられた。英語力が不足しているが故に、発表内容や質疑応答を正確に聞きとれなかったり、自身の発表での質疑応答において、十分に応答できなかったりするなど悔しい思いをした。こうした経験をバネにし、自身の英語力を何とか高めていきたいと考えている。

最後になりましたが、国際会議参加にあたって支援をしていただき誠にありがとうございました。今回の経験を基に、今後とも高いモチベーションを保ち、研究を進めてまいります。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 20日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 同志社大学大学院心理学研究科
博士課程 後期課程

氏 名 山口 大輔



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 2015 conference of the International Society for Research on Emotion (国際感情心理学会 2015 年度大会)
公式ホームページ URL	http://isre.org/
開催期間	2015年 7月 6日 ~ 2015年 7月 10日
旅行期間	2015年 7月 5日 ~ 2015年 7月 12日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Université de Genève, Geneva, Switzerland (スイス・ジュネーブ・ジュネーブ大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	山口大輔 (同志社大学大学院心理学研究科) 鈴木直人 (同志社大学心理学部)
発表題目 ※正式名と日本語訳	<i>How emotion experience affects cardiovascular responses to competitive stress?</i> 感情経験は競争ストレスに対する心臓血管系反応にどのような影響を及ぼすのか
補助金額	80,000 円 (内訳: 航空運賃 ¥139,720 の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、国際会議等参加旅費補助に採択いただき、国際会議への参加および発表の機会をいただけたことに関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。以下、活動内容ならびにその成果について報告させていただきます。

【活動内容】

2015年7月6日～10日、スイスのジュネーブ大学にて開催された「国際感情心理学会2015年度大会 (The 2015 conference of the International Society for Research on Emotion)」に参加了。報告者は、7月10日の14:00～15:00のセッションにて、「感情経験は競争ストレスに対する心臓血管系反応にどのような影響を及ぼすのか」のタイトルでポスター発表を行った。その他、感情と自律神経系に関わるシンポジウムやワーキングメモリーと感情制御に関わるシンポジウムなどに参加した。ポスターセッションにおいても、関連分野の先生方との意見交換を行った。

【成果】

1. ポスター発表 報告者の研究発表は、競争ストレスに対する血行動態の亢進が、競争場面で生じるポジティブ感情やネガティブ感情の経験の違いでどのような影響を受けるのかを検討したものであった。競争においては、ネガティブ感情はもちろんのこと、ポジティブ感情も喚起することが知られているが、本研究の結果からは、競争におけるポジティブ感情の喚起の差異が競争ストレスに対する血行動態に異なる影響をもたらす可能性が示された。ポスター発表の時間は1時間ほどであった。その間、何人かの先生方が訪問され、ハンドアウトを持ち帰られた。また、ポスターの写真を撮っていかれる方もいらっしゃった。それほど多くはなかったが、国内外の先生方と直接意見交換を行うこともできた。これらの内容は、本研究のより深い考察に有益なものであった。一方で、海外の先生方との意見交換の際には、思うようなコミュニケーションができない場面が多々あり、この点は今後の課題として挙げられた。しかし、自身の研究をもっと世界に向けて発信したいという気持ちにも繋がる良い経験であった。

2. その他の研究発表を聞いて Meuleman らのグループは、感情をダイナミックなシステムと位置づけ、時間的なファクターを考慮して感情の要素(認知、動機づけ、生理反応など)を検討する重要性を主張していた。この点については、報告者も重要な観点であると考えており、非常に有益な情報を得ることができたと思っている。加えて、分析の方法論なども紹介されており、より具体的な内容で今後の研究に活かせるものであった。また、同じ日本人の大学院生がオーラルでの発表を行っていたことが印象深かった。当然のことではあるが、母国語ではない英語で、日本人が1人で発表をしている姿には誇らしさを感じた。このような姿を見て、自身との差を痛感したと同時に大きな勇気をもらったような気がした。次回は自身もこのような機会に立ち会えるよう努めたい。

このたびの海外学会への参加を通して、議論の方法や学会の進行に至るまで、日本では味わうことのできない雰囲気を経験することができ本当に良い機会を与えていただいたと思います。最後になりますが、このような機会を与えていただき本当にありがとうございました。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 4日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

東京大学大学院教育学研究科
教育心理学コース 修士課程 2年

氏 名

小島 淳広



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The International Society For The Study Of Individual Differences (ISSID) Conference 2015 国際個人差学会 2015 年度大会
公式ホームページ URL	http://conference.uwo.ca/issid/index.cfm
開催期間	2015年 7月 27日 ~ 2015年 7月 31日
旅行期間	2015年 7月 26日 ~ 2015年 8月 2日 (申請書では 8月 1 日までとしていましたが、予算の都合により安価な 8月 1 日の早朝発・8月 2 日着の便に変更致しました)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Western University, London, Ontario, Canada カナダ, オンタリオ, ロンドン, ウェスタン大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小島淳広 1, 川本哲也 1, 楠原良太 1, 村木良孝 1, 遠藤利彦 1 (1 東京大学大学院教育学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Changes of personality traits of university students in voluntary activities 自発的な活動における大学生のパーソナリティ特性の変化
補助金額	80,000 円 (内訳 東京・ロンドン間の航空運賃 163,480 円の一部として)

- 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助金」を交付いただき、2015年7月27日～2015年7月31日にカナダ・ロンドンで開催された『The International Society For The Study Of Individual Differences (ISSID) Conference 2015 (国際個人差学会 2015年度大会)』にて参加の機会を得ましたことを、心より感謝申し上げます。以下、本補助金の使用状況、発表、及び参加の状況についてご報告致します。

【補助金の使用状況】

補助を受けた80,000円は、東京↔ロンドン間の航空券旅費163,480円の一部として全額使用した。

【成果】

1. ポスター発表

発表は大会2日目(2015年7月28日)のPoster Session I (16:30-18:00)において行われた。申請者は”Changes of personality traits of university students in voluntary activities (自発的な活動における大学生のパーソナリティ特性の変化)”というタイトルでポスター発表を行った。今回の発表内容は、大学が行っている「体験活動プログラム」(農業体験、行政体験、ビジネス体験、海外活動等の活動の機会の学生への提供)が参加学生のパーソナリティに与えた影響の検討を目的として行われた研究の報告であった。体験活動の前後、計2時点において質問紙調査を行い、量的に分析し、考察した。

大学が提供する課外活動に関して、実際どのような効果が学生にもたらされるのかについての実証的な研究はまだ十分になされていない。そのため、本発表内容のような研究の蓄積が今後求められるだろう。本会議においても、課外活動の効果は不明確な点が残るものその重要性は広く認識されていることやパーソナリティの変化を扱っていたことからか、セッション時間には数多くの研究者が本ポスターに関心を寄せてくださった。個人差やパーソナリティに興味を持つ海外の研究者に本研究を知り、評価していただくことができた。また、質疑応答や議論が行われ、結果の解釈や今後の研究に関する示唆を得ることができ、大変有意義な発表となった。

2. 発表以外の大会への参加

行動遺伝学を用いたパーソナリティや価値観、態度の研究といったような、進化心理学的視点からのPaper SessionやSymposiumが多い印象を受けた。その中の一つ、Kandler et al. の双生児法を用いた研究において、想定される要因を精緻に組み込んだモデルが提示されており、その厳密さへのこだわりに刺激を受けた。パーソナリティの分野でのDark Triadに関する発表も数多くなされており、個人差研究の潮流を体感することができた。

このように、本大会では様々な研究の最前線に触れることができた。今後、本大会への参加から得られた視野の広がりを他の研究者との議論や自身の研究に活かしていきたい。また、海外の研究者との交流はもちろん、日本から参加している研究者の方々と日本での大会以上に交流を深めることができた点も、逆説的ではあるが国際会議に参加してこそ得られた成果だと感じた。

【付記】

海外の研究の最前線に触れ、研究についての英語を用いたコミュニケーションを体験し、今後の研究と英語コミュニケーションスキル獲得のモチベーションがとても高まりました。大変得難い良い経験となりました。助成して頂いた日本心理学会ならびに学会関係者の方々に厚く御礼申し上げます。本大会での経験を今後の自身の研究活動に活かし、より一層精進致します。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 7 月 17 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 桜美林大学心理学研究科臨床心理学専攻
修士1年生

氏 名 立花 美紀



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	<u>The 5th Asian Cognitive Behavior Therapy Conference</u> 第5回 アジア認知行動療法学会
公式ホームページ URL	http://cbtchina.com.cn/2015acbtc/en/
開催期間	平成27年 5月 16日 ~ 平成27年 5月 17日
旅行期間	平成27年 5月 15日 ~ 平成27年 5月 17日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	中国(国)・南京(都市)・ Jiangsu Conference Center (Zhongshan Hotel)(会場)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	立花 美紀 ¹ , 前田 駿太 ² , 山下 歩 ² , 田中 佑樹 ² , 佐藤 友哉 ^{2,3} , 嶋田 洋徳 ⁴ , 小関 俊祐 ⁵ ¹ 早稲田大学人間科学部 ² 早稲田大学大学院人間科学研究科 ³ 日本学術振興会特別研究員 ⁴ 早稲田大学人間科学部教員 ⁵ 桜美林大学心理・教育学教員,
発表題目 ※正式名と日本語訳	The Effect of Attainable Goal-Setting on Self-Appraisal in Individuals with Social Anxiety 社交不安者における達成可能な目標設定が自己評価に与える影響
補助金額	50000 円 (内訳 航空費と宿泊費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。

- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2015年6月16日から17日に開催されたThe 5th Asian Cognitive Behavior Therapy Conference(第5回 アジア認知行動療法学会)に参加し、ポスター発表を行った。

報告者は、1日目6月16日(土)の17:00~18:00の間ポスターセッションで発表を行った。報告者の在籍時間は60分であった。発表題目は、The Effect of Attainable Goal-Setting on Self-Appraisal in Individuals with Social Anxiety(社交不安者における達成可能な目標設定が自己評価に与える影響)であった。

発表以外では、報告者の研究テーマに関連するシンポジウムや口頭発表に参加した。具体的には、社交不安に関する実験研究を行っている研究者の口頭発表や認知行動療法がどのように疾患に適用されているのかに関するシンポジウム等に参加した。他の参加者の発表も積極的に聴講し、交流を深めることができた。

【成果】

1. ポスター発表

本大会では、ポスターセッションの時間が60分だったため、報告者はポスター前に在籍し、発表、議論を行った。ポスター会場への全体的な人の入りは多く、1部屋全部を使って行われたポスター会場はアジア圏の研究者を中心に賑わっていた。また、報告者の発表への訪問者は10名程度おり、60分という時間枠の中で他国の大学院生や研究者の方々と研究に関する議論ができた。具体的には、中国の大学院生から「実験の手続きにおいて目標設定の方法はどのようにするのか」という質問を受けポスターを参照しながら説明を行った。その際に、実験の手続きにおいてもう少し異なる方法の手続きを用いてみることも必要なのではないかという指摘を受け、今後の研究に取り入れていきたいと感じた。

2. シンポジウム等の参加

社交不安に関する実験研究の口頭発表では、信念が社交不安に与える影響に関する発表やエクスボージャーの効果に関する発表、キャンプ実習が子どもの不安にどの程度影響を与えるのかに関する発表を聴講した。報告者も社交不安の実験的研究を行っていたため、実験手続きに関してや問題設定の部分で他国の方々の質問を聴き、様々なアプローチ方法があることを学べたため、非常に有意義に過ごすことができた。また、疾患に対して認知行動療法がどのように適用されているのかに関するシンポジウムでは、世界の研究者たちがどのように疾患に対して認知行動療法を用いて治療を行っているのかを事例を通して知ることができ、貴重な機会を得ることができた。

【付記】

この度は、国際会議等参加旅費補助金の支給対象として採択していただき、日本心理学会ならびに関係者の皆さんに心より感謝申し上げます。今回の会議参加を通じて学んだこと、感じたことを今後の報告者自身の研究に必ず生かし、より一層研究に邁進していくたいと思います。以上をもって活動報告、ならびにその成果の報告とさせていただきます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 4日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院人間科学研究科
博士後期課程 2年

氏 名 小園 麻里菜 

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 21st Annual Meeting of the International Centenarian Consortium (第 21 回国際百寿者研究会議)
公式ホームページ URL	なし
開催期間	2015年 6月 17日 ~ 2015年 6月 21日
旅行期間	2015年 6月 16日 ~ 2015年 6月 22日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Italy, Sardinia, Orlando Hotel (イタリア・サルデニヤ島・オーランドホテル)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小園麻里菜 (大阪大学大学院人間科学研究科) 権藤恭之 (大阪大学大学院人間科学研究科) 石岡良子 (慶應義塾大学大学院理工学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	The relationships between leisure activities and cognitive function in Japanese Centenarians-Findings from Tottori Centenarian Study- 日本の超高齢期における余暇活動と認知機能との関連 -鳥取県鳥取市超高齢者生活実態調査結果から- ※申請時と発表題目に変更がありました
補助金額	80,000 円 (内訳 往復航空券代 126,280 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者が The 21st Annual Meeting of the International Centenarian Consortium (以下、ICCと略す)に参加するにあたり、日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金を頂戴し、厚くお礼申し上げます。今回の経験を自身の今後の研究生活に活かし、より一層深く研究に取り組んでいく所存です。以下、ICCの概要と、申請者らが行った研究発表の概要についてご報告いたします。

【ICCについて】

ICCは、「百寿者」と呼ばれる、百歳以上の方々を対象にした研究を行う研究者が集まり、研究発表や意見交換を行うことを目的とした国際会議である。第21回目となる今年は、日本をはじめ、イタリア、アメリカ、香港、ドイツ、スイス、ポルトガル、デンマーク、エストニア、ベルギー等から総勢約40名の研究者が一同に会し、百寿者に関して広く議論を行った。この研究会議の特徴は、参加者が心理学を背景にもつ者だけでなく、社会学・人口学・生理学・医学・歯学・栄養学など多分野に渡り、研究発表だけでなく、現地の超高齢者の生活実態を把握するための現地視察プログラム、国際共同研究の企画や進歩会議が行われることが挙げられる。そのため、自分自身の専門分野からのアプローチだけにとどまらず、様々な背景を持った研究者と意見を交わすことで、新たな研究の切り口を知る絶好の機会となった。特に、研究者だけでなく、大学院生の私にも発表機会があり、英語で口頭発表を行い、アドバイスをいただくことができ貴重な経験ができた。主専攻分野や年齢に関係なく、長寿要因の解明という未知な問い合わせについて議論することができる有意義な研究会議であると思われる。現地視察では、イタリアのサルジニア島の長寿者が多く住む3地域に出向き、昔ながらの町並みを体感し、緑豊かな地域でお元気に過ごされている高齢者の暮らし向きや地域の取り組みを知ることができた。なかでも、現地の百寿者やその家族にインタビューを行ったこと、現地の長寿を祝う地元の公式シンポジウムに参加できたことが強く印象に残った。

【申請者の発表】

申請者は、The relationships between leisure activities and cognitive function in Japanese Centenarians-Findings from Tottori Centenarian Study-という題目で口頭発表を行った。本発表では、鳥取県鳥取市の自治体との共同研究である超高齢者生活実態調査の概要および結果の一部として申請者の研究課題である高齢期の余暇活動と認知機能との関連を報告した。本調査は、鳥取市在住の100歳以上の方（以下、百寿者群と表記する）および現在90歳前後で100歳まで長生きされる可能性が高いお元気な方（以下、90歳群と表記する）を対象に、現在の身体状態や精神状態、その他の特徴について郵送調査を実施した。超高齢者の特徴を把握し、その結果に基づいて広く市民に健康長寿に関して啓発することを目的とした調査である。申請者の研究は、超高齢者が日頃実施している余暇活動がどの程度現在の認知機能と関連がみられるかを目的とした。まず、余暇活動の内容を分類し、各活動の実施頻度を算出した。90歳群が実施している余暇活動と百寿者群が現在実施している余暇活動を比較したところ、重なる部分が多いことが明らかになった。また、異なる部分として、90歳群の余暇活動には畠仕事、外出、寺や神社に参拝といった身体を使う活動が挙がっていることに対して、百寿者群の余暇活動は、屋内の活動や身体に負担が少ない活動が挙がっていることが分かった。次に、余暇活動の内容に関わらず、実施している余暇活動の種類が多い人ほど、認知機能得点が高いことが示唆された。これらのことから、百寿者は、習慣的にこれらの余暇活動を行うことでバランスの良い日常生活が送っていたことから、百歳を迎えることができたと推察する。今後修正する点は多々あるが、本研究のアイデアはおもしろく、引き続き詳細な分析を行って国際雑誌に投稿してみてはどうかというコメントも頂くことができ、非常にうれしく思った。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 31日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 立正大学大学院心理学研究科
対人・社会心理学専攻修士課程 1年

氏 名 在原 克彦



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Association for the Scientific Study of Consciousness 19 意識学会
公式ホームページ URL	http://www.theassc.org/assc_19
開催期間	2015年 7月 7日 ~ 2015年 7月 10日
旅行期間	2015年 7月 6日 ~ 2015年 7月 11日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Centre Universitaire des Saints-Pères - Saints Germain-des Près area フランス, パリ, パリ大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	在原 克彦, 有賀 敏紀, 古屋 健(立正大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Awareness of commodity prices activates consumers' purchase hesitation during decision making. 商品価格に基づく消費者のためらいが購買意思決定に及ぼす影響
補助金額	8万円(内訳: 往復航空券)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

申請者は、2015年7月7日～10日にフランスのパリにて開催された意識学会に参加し、ポスター発表を行った。発表内容(日本語)は以下の通りであった。

問題と目的

Tversky & Kahneman(1981)は、同じ値引き額であるにもかかわらず、高価格の商品からの値引きよりも低価格の商品からの値引きを得るために、我々は移動するコストを惜しまないことを明らかにした(電卓とジャケットの購入問題)。この結果は基準価格に依存した非線形の価値評価によって解釈されてきた(プロスペクト理論)。しかし、プロスペクト理論における価値関数の文脈では、我々は利得や損失をその程度にかかわらず受け入れることが前提となっている。つまり、消費行動の文脈で言えば、商品価格そのものに対する人間の態度の違いは考慮されていない。そこで本研究は、商品価格に基づく購入のためらいによって電卓とジャケットの購入問題の結果(すなわち、他店への移動コストの評価の違い)が説明可能かを検証した。

方法と結果

電卓とジャケットの購入問題(Tversky & Kahneman, 1981)を改変した問題について、質問紙形式で回答を求めた。実験1($N=53$)では先行研究の追試を行い、結果を再現することに成功した。同時に、実験参加者に価格の異なる商品に対する購入のためらいについての問題に回答させた。その結果、実験参加者は低価格の商品よりも高価格の商品に対して購入のためらいが高いことを明らかにし、先行研究の結果が購入のためらいの差異によって生じた可能性を示した。実験2($N=53$)では実験1で用いた追試の文章に、実験参加者が高価格と低価格の二つの商品を確実に購入することを明示する文を加えた。その結果、先行研究で報告された効果は減少した。実験3($N=51$)では実験1で用いた追試の文章に、同じ価格の二つの商品に関して、実験参加者の購入のためらいが異なることを明示する文を加えた。その結果、先行研究と同様の結果を得ることに成功した。

考察

一連の結果を総合的に考察すると、(a)商品価格に基づいて購入のためらいの差異を生み出す可能性がある、(b)購入のためらいは値引きのための移動コストの評価、すなわち電卓とジャケットの購入問題の結果に影響を与える可能性がある、と言える。本研究では、購入のためらいが電卓とジャケットの購入問題の結果を決定づけるとは言い切れなかったが、一連の結果は本研究で提案した仮説と概ね一致する傾向であった。つまり本研究では、商品価格に基づく購入のためらいは、電卓とジャケットの購入問題の結果(Tversky & Kahneman, 1981)を生み出す一つの要因となり得ることを指摘した。

以上の内容について発表し、国内外問わず多くの方からの示唆が得られた。まず、購入のためらい(purchase hesitation)という言葉を使用することの必要性について多くのご指摘を受けた。すなわち、本研究におけるためらいという言葉の意味は曖昧であり、ポスター中に併せて用いていた購入の確実性(certainty of purchase)という言葉に統一した方が良いのではないかというご意見をいただいた。もしためらいという言葉を用いるのであれば、質問紙の回答にかける時間を測定しそれを指標としてすることで、言葉の意味をより反映した研究となるのではないかというご指摘もいただいた。

加えて、発表内容とは無関係ではあるが、あまり多くの参加者に発表を聞いてもらえなかつたことが反省点として挙げられる。ただ相手から話しかけられるのを待つだけではなく、こちらから積極的に声をかけ興味を持つてもらえるようアピールする必要があることを感じた。

初めての海外学会への参加は大変貴重な経験となった。今後日本や海外で発表する機会があれば本学会で得られた示唆や反省点を生かし、より有意義なものにしたい。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 7月 20日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院・博士後期課程 3年

氏 名 三浦 絵美



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Association for Psychological Science 27 th Annual Convention (第 27 回 心理科学学会)
公式ホームページ URL	http://www.psychologicalscience.org/index.php/convention
開催期間	2015年 5月 21日 ~ 2015年 5月 24日
旅行期間	2015年 5月 19日 ~ 2015年 5月 26日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	New York, NY, USA (ニューヨーク・ニューヨーク州・アメリカ合衆国)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	三浦絵美 筑波大学大学院人間総合科学研究科
発表題目 ※正式名と日本語訳	Is narcissism associated with uninvolved attitude toward friends among Japanese adolescents? (日本大学生の自己愛傾向と友人関係における非干渉意識の関係)
補助金額	80,000 円 (内訳、往復航空券および大会参加費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、Association for Psychological Science 27th Annual Convention での研究発表にあたり、貴会より国際会議等参加補助金を助成いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

【活動内容】

2015年5月21日～24日にかけて、アメリカ・ニューヨークにて開催された Association for Psychological Science 27th Annual Convention に参加し、“Is narcissism associated with uninvolved attitude toward friends among Japanese adolescents?”という題目でポスター発表を行った。自身の発表以外には、関連領域の研究発表を聴いたり、著名な研究者によるシンポジウムを聴講したりした。

【申請者の発表】

申請者は、5月23日（土）12:30-13:20のポスターセッションにて研究発表を行った。本研究では、栗原（1989）や千石（1998）によって指摘される青少年の特徴である、友人関係における関係の希薄さに着目した。上野他（2004）によれば、友人関係を断絶するのではなく、関係を保持したまま、互いに適切な距離を保つ付き合い方があるという。本研究では、このような関係性を非干渉的態度と捉えた。このような対人困難感は、自己愛傾向と関連することが示唆されている。本研究では、一連の先行研究の知見を踏まえて、青少年の友人関係における非干渉的態度と自己愛の関係について検討した。本研究の成果を発表する上で、日本の青少年における独特な友人関係の機微、そしてそれに対する日本人研究者の考察がどの程度外国人研究者に伝わるかは興味深い点であった。議論した研究者は、調和を重んじる日本独特の文化的背景を足がかりに、非干渉的に振る舞う青少年について議論しているようだった。欧米の研究者は、特に文化差で議論する者が多く、なぜそのように振る舞わざるを得ないのか、そう振る舞うことのメリットなどについて聞かれ、今後の研究の方向性や考察の視点の気づきを得ることができた。

【その他の発表】

Symposium では、“Social Media Behavior: The Role of Narcissism, Self-Esteem, and Socio-emotional Needs”を聴講した。Hannah Doucette 氏による “Let Me Take a ‘Selfie’: Narcissism or the new normal? Associations between self-photography, narcissism, and self-esteem” や、Jessica McCain 氏による “Narcissism and ‘Selfies’” はトレンドを掴んでおり、聴講者も非常に多かった。こうしたトレンドを掴んだ研究は、注目されているからこそ、実験（あるいは調査）の着想から実施、分析、成果発表までのスピードが非常に重要である。若手研究者が新しい発想でスピーディーに研究を積み重ねている姿を見て、申請者自身も精力的に研究活動に励まなければと鼓舞される思いであった。さらに Invited Talk では、Mikki Hbel 氏による “Stand Up and Be Counted: Research Focusing on GLBT and Allies” が講演された。GLBT（またはLGBT）は、現在日本でも注目されつつあるテーマである。他には、近年アメリカで注目されているマインドフルネスに関する研究発表が非常に多く、最新の研究動向などを知る機会となった。学会期間中は、ポスターセッション、シンポジウム、招待講演などさまざまな形で、さまざまな分野の最新の研究動向を見てまわることができ、非常に刺激的な期間となった。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 7 月 31 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 京都大学大学院教育学研究科
博士後期課程 1 年

氏 名 枝田 恵



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	45th Annual Meeting of the Jean Piaget Society 第 45 回 ピアジェ学会
公式ホームページ URL	http://www.piaget.org/conference.html
開催期間	2015 年 6 月 4 日 ~ 2015 年 6 月 6 日
旅行期間	2015 年 6 月 2 日 ~ 2015 年 6 月 11 日 (学会終了後に研究室訪問を行ったため、帰国までの期間が長くなっています)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Sheraton Centre Toronto Hotel, Toronto, Canada カナダ、トロント、シェラトンセンタートロントホテル
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 1 年 枝田 恵
発表題目 ※正式名と日本語訳	The development of understanding and producing facial expressions in 4-6 year-old children 4-6 歳児における表情の理解と表現の発達
補助金額	80,000 円 (内訳 航空券代として)

- 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2015年6月4日から6日かけてカナダのトロントで開催された 45th Annual Meeting of the Jean Piaget Society (第45回ピアジェ学会)に参加した。ピアジェ学会は、毎年北米で開催されている国際学会であり、認知発達研究が中心である。学会のテーマは毎年異なり、今年度は "Neuroplasticity & Change" であった。今年度は、シンポジウムが17件、口頭発表が17件、ポスターが約100件という規模で実施された。申請者は、6月5日に The development of understanding and producing facial expressions in 4-6 year-old children (4-6歳児における表情の理解と表現の発達)という題目でポスター発表を行った。

【成果】

1. ポスター発表

本発表では、表情の理解と表現の関連を発達的に調べることによって、幼児の表情表現について検討した研究を報告した。本研究では、4歳から6歳の幼児48名に喜び・悲しみ・怒り・驚きの感情を対象に他者表情の理解を測る課題と自己表情の表現を測る課題を行った。結果として、年長児(5-6歳児)では、選択課題と表現課題に正の相関が見られ、物語に合う表情の選択が正確にできるほど、自分の顔で表情を表現することも正確にできた。その一方で、年中児(4-5歳児)では、表情選択課題と表情表現課題には有意な相関が見られず、表情を正確に選択できるほど、実際に表情での表現が正確にできるわけではなかった。また表情表現課題の成績には、年中児と年長児間で年齢差が見られなかった。これらの結果から、表情理解と表現の関係が年齢に伴い変化し、成長するにつれ、表情理解と表現が連動する可能性が示唆された。

発表では、多くの研究者から疑問や意見を聞くことができ、活発に議論を行うことができた。申請者の研究に関する研究についての情報や、実験で得られた幼児の表情の分析法に関するアドバイスなどをいただき、非常に有意義な発表であった。今回の発表を通して、今後の研究に役立つヒントを得ることもできた。

2. その他の発表

今回のピアジェ学会では、テーマにも掲げられていたように神経発達に関する講演をたくさん聞くことができた。学内ではあまり聞くことができない分野であるため、新鮮であり、大変興味深かった。それと同時に、神経系の知識がまだ自分には不足していることを痛感し、こうした知識を身につけるモチベーションの向上にもつながる良い機会であった。また、Moral development (道徳性の発達)に関する発表も多く、新たに得た知見もあり、有益であった。今回の学会では、幅広いトピックの発達研究に関する発表を数多く聞くことができた。発達研究に焦点を当てた国際学会に参加するのは今回が初めてであったが、今回の学会参加により多くのことを学ぶことができ、刺激的な3日間を過ごすことができた。

【付記】

この度は、申請者の国際学会参加に対し、国際会議等参加旅費の助成をいただき、日本心理学会ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今回の学会参加で学んだこと、経験したこと、今後の研究生活に活かし、より一層研究に邁進していきたいと思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 31日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 立正大学大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻

氏名

高尾 沙希



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Association for the Scientific of Consciousness 意識学会	
公式ホームページ URL	http://www.theassc.org/assc_19	
開催期間	2015年 7月 7日 ~	2015年 7月 10日
旅行期間	2015年 7月 6日 ~	2015年 7月 10日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Centre Universitaire des Saints-Pères - Saints Germain-des Près area (フランス, パリ, パリ大学)	
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	高尾沙希 ¹ ・近藤あき ² ・有賀敦紀 ¹ ・高橋康介 ³ ・渡邊克巳 ^{3,4} ¹ 立正大学, ² 京都工芸繊維大学, ³ 東京大学, ⁴ 早稲田大学	
発表題目 ※正式名と日本語訳	Magnifying glass optical illusion occurs for multiple stimuli but not for a single stimulus 拡大錯視は単数刺激ではなく複数刺激の時に生起する	
補助金額	80,000円 (内訳 航空券代 127,970円の一部)	

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

6日の夕方に現地に到着し、翌日7日から10日まで初めての国際学会に参加しました。7日から9日までは他の参加者のポスター発表やトーク発表を聴講しました。特にトーク発表では議論が盛んに行われており、聴講側の積極的な姿勢に感銘を受けました。10日の自身の発表では、多くの方に研究を知ってもらい、ご意見を伺うという目標のため、自発的な発表を心がけました。その中でも専門ではない方々にもお越し頂き、関心を持って頂けたことが嬉しく思いました。また、このメカニズムを活かした実用可能性についてもご教示頂けた貴重な時間になりました。今回の国際学会は多くの背景を持った方々との議論の機会があり、ご意見を頂ける場であると感じました。次回はより深い点についても議論できるよう、語学能力を上げたいと強く思いました。

【発表内容】

本研究では、主観的輪郭に囲まれた文字が、囲まれていない文字に比べて大きく見えるという拡大錯視の生起メカニズムについて、精神物理学的研究を行った（図1）。実験1では、縦2行×横7列の合計14個の円を刺激として画面に呈示し、真ん中（3列目）の2つの円の間に注視点を呈示した（図2）。実験参加者の課題は、注視点を境として、左右のどちらの領域の円が大きく見えるのかを比較することであった（恒常法）。このとき、各領域内の円の大きさは同じであったが、領域間の円の大きさは7段階で操作された。さらに、左あるいは右の領域において円が呈示される条件として、以下の3条件が操作された（1要因3水準参加者内計画）。主観的輪郭条件では、左右どちらかの6個（2行×3列）の円がパックマンで構成される主観的輪郭（正方形）に囲まれていた。主観的輪郭+実輪郭条件では、主観的輪郭条件における輪郭部分が実線でなぞられた。輪郭なし条件では、円以外の刺激は呈示されなかった。実験の結果、左右の領域の円の大きさが物理的に同じであった条件において、輪郭が呈示された2つの条件（主観的輪郭条件と主観的輪郭+実輪郭条件）で輪郭なし条件よりも輪郭内の円が有意に大きく知覚された。したがって、拡大錯視を測定することに成功した。しかし、輪郭内に呈示される円を1つに減らした実験2や実験3では、拡大錯視は生じなかった。実験4では、円の代わりに縦の線分を横並びに複数呈示し、参加者に線分の長さを比較させても、拡大錯視は生じることを明らかにした。

これらの実験の結果から、本研究では（1）拡大錯視が生じるためには、輪郭内に複数の刺激が存在することが必要であること、（2）拡大錯視は主観的輪郭のみならず、実輪郭でも生じること、（3）線分を用いた場合は、刺激が輪郭に重なる必要がないこと、（4）拡大錯視は大きさの知覚だけでなく長さの知覚についても生じることがわかった。

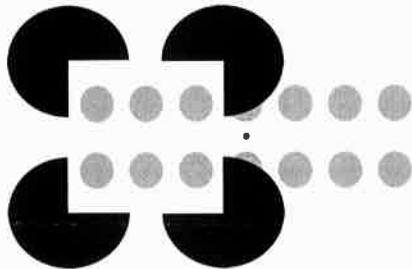
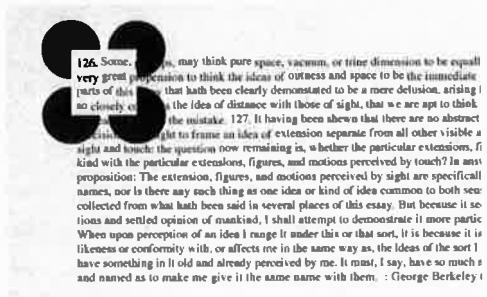


図1 拡大錯視

図2 実験1の刺激例（主観的輪郭条件）

【謝辞】

日本心理学会の会員の皆様、審査員の皆様、この度は国際学会の参加にあたり、助成金賜りましたことを深く御礼申し上げます。このような貴重な機会を与えて頂いたことで、私にとって多く面で有意義な時間を過ごすことができました。この経験をこれからのお仕事に最大限活かしていきます。ありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 10月 2日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程 2年

氏 名

川嶋 賢治



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	International Conference on Education, Psychology, and Social Science2015 (教育・心理・社会科学国際会議 2015)
公式ホームページ URL	http://iceps2015.conf.tw/site/Page.aspx?pid=901&sid=1055&lang=en
開催期間	2015年8月5日 ~ 2015年8月7日
旅行期間	2015年8月4日 ~ 2015年8月7日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taiwan, Taipei, The Grand Hotel. (台湾, 台北, グランドホテル)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	川嶋賢治 (筑波大学人間総合科学研究科) 松井豊 (筑波大学人間系)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Post Traumatic Growth Of Staff Working at The Time of the 2011 Great East Japan Earthquake in Facilities for Intellectual Disabilities. (東日本大震災で被災した知的障害者支援施設職員の心的外傷後成長)
補助金額	50,000円 (内訳: 学会参加費・宿泊費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2015年8月5日から7日にかけて、台湾・台北市内にあるThe Grand Hotelで開催された、International Conference on Education, Psychology, and Social Science2015(ICEPS2015)においてポスター発表を行った。申請者の発表日時は8月6日の10:50~12:00であり、発表題目はPost Traumatic Growth Of Staff Working at The Time of the 2011 Great East Japan Earthquake in Facilities for Intellectual Disabilities(日本語題目：東日本大震災で被災した知的障害者支援施設職員の心的外傷後成長)であった。本学会には、アジア圏を中心とする26ヶ国以上の国から教育・心理・社会科学を専攻とする研究者、実践家が集い、各々の研究成果の発表・報告を行った。参加者人数は100人程度と中規模程度の学会ではあったが、今年度はInternational Conference on Business, Information, and Service Science2015(ビジネス・情報・サービス科学国際会議 2015)と呼ばれる国際学会も同会場にて開催されており、自身の研究領域のみならず、多種多様な人文・社会科学系の研究知見に触れることができる、とても中身の濃い国際学会であった。また、ICEPS2015の会場となったThe Grand Hotelは台湾の観光名所としても有名なホテルであり、中国の伝統的な宮廷建築様式を目の当たりできることも本学会の魅力の一つであった。さらに、コーヒーブレイクの休憩時間やランチの時間など、研究に関して議論する場が数多く設けられていた。

【成果】

1. 自身の研究発表

申請者の発表内容は、東日本大震災で被災した知的障害者支援施設職員の惨事ストレス反応および精神的健康と、心的外傷後成長(Post Traumatic Growth)との関連についての探索的に検討したものである。東日本大震災で被災した知的障害者支援施設職員155名を対象に、改訂版出来事インパクト尺度(IES-R)および精神的不健康度指標(GHQ12)に回答してもらい、調査時点でのメンタルヘルスについて測定を行った。さらに、施設職員の心的外傷後成長に関して、「東日本大震災を経験して自身、または施設が良い方向に変わったと思う事や得られた教訓等がありましたら自由にお書きください」という教示文を表示し、自由記述形式で回答を求めた。その結果、震災から2~3年経過した時点において、IES-RおよびGHQ12のどちらにおいても極めて高いハイリスク率を示していた。一方、心的外傷後成長との関連について、惨事ストレス反応および精神的不健康度を示す職員ほど「生命の大切さ」「他者への配慮・感謝」といった肯定的な心的変化が見られた。

ポスター発表時間は1時間程度であったが、その間に多くの研究者・実践家の方が申請者のポスター発表に訪れ、たくさんの意見や質問を頂くことができた。中でも、日本と同様地震大国であるインドネシアの研究者の方々とは様々な質問・意見交換を行うことができ、とても充実した時間を過ごすことが出来た。そうした反面、自分自身の英語コミュニケーションの拙さを痛感し、次回の国際学会への士気が高まった。

2. 他の研究発表

本学会での研究発表、特に教育関連の発表において特に印象的であったのは、フォローアップまで組み込んだ縦断調査が数多く見られたという点であった。人間を対象とした調査を行う以上、一時点での調査研究で終わらせるのではなく、長期間同じ対象と向き合いながら現象を把握することに努め、さらに心理的な介入方法まで視野に入れた研究計画を立案していく重要性を実感した。

【最後に】

この度は、申請者の発表に対し、国際会議参加旅費の助成を頂きましたことに、厚くお礼申し上げます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2016年3月4日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 一橋大学大学院 博士課程

氏名 加藤樹里



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 17th Society for Personality and Social Psychology Annual Convention パーソナリティ・社会心理学会 第17回大会
公式ホームページURL	http://meeting.spsp.org/2016/
開催期間	2016年1月28日～2016年1月30日
旅行期間	2016年1月27日～2016年2月4日 (本会議後に研究打ち合わせのため、申請時より期間を変更しました)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, State of California, San Diego San Diego Convention Center アメリカ合衆国 カリフォルニア州 サンディエゴ市 サンディエゴ・コンベンションセンター
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	加藤樹里(一橋大学大学院) 村田光二(一橋大学大学院)
発表題目 ※正式名と日本語訳	The effect of reminders of money on loneliness お金のプライミングが孤独感に及ぼす影響
補助金額	8万円(内訳 航空券代、大会参加費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は貴学会の国際会議参加旅費補助を受け、The 17th Society for Personality and Social Psychology Annual Conventionに参加し、研究発表を行いました。以下に活動概要と、参加・発表による成果をご報告いたします。

【活動概要】

アメリカのサンディエゴ・コンベンションセンターにおいて、2016年1月28日から30日に渡って開催されたThe 17th Society for Personality and Social Psychology Annual Conventionに参加した。大会の開催期間は3日間で、1日目にはPre conferenceが開かれた。Pre conferenceでは社会心理学、パーソナリティ心理学に関連する様々なテーマごとに、シンポジウムやポスターセッションが設定されていた。報告者はEmotionのPre conferenceに参加し、ポスターセッションにおいて発表“Why are we emotionally moved? -The effect of finitude salience on being moved”を行った。2日目、3日目には多くのシンポジウムや口頭・ポスター発表が行われ、報告者は2日目の29日に“The effect of reminders of money on loneliness”という題目でポスター発表を行った。

【成果】

1. 自身の研究発表

発表内容は、お金概念が活性化することが孤独感に及ぼす影響を検討するというものだった。お金概念が活性化すると自己志向的、自己充足的な態度や行動がもたらされることが先行研究により明らかになっている。本研究の着眼点は、人間にとって他者との関係性は必要不可欠であり、自己充足的な状態には必ずしも完全に満足せず、感情としては孤独感が高まるのではないかということであった。そこで、大学生に対し乱文構成課題によるプライミング操作でお金概念を活性化させ、その後孤独感の評定を求めた。すると、統制条件に比べ、お金概念が活性化した条件では孤独感が高まっていた。またその影響は自尊感情により調整されていた。これらの結果を、2日目29日の18:30から20:00までの90分間、ポスター発表した。発表時間中は様々な分野の研究者にポスターに関心を抱いてもらい、繰り返し内容を簡潔に説明することでスムーズに自分の研究を紹介できるようになった。また、貴重な意見や新しい疑問点をもらえたことで、今後の研究の方向性にとって実りある示唆を多くいただけた。さらに大会後も、引用していた論文の研究者から研究内容について問い合わせをいただき、同テーマの研究者とのつながりも生まれた。

なお1日目に参加したEmotionのPre conferenceにおいてもポスター発表を行った。同分野・他分野の研究者からポスターを見て質問や意見をいただいたことで、英語圏では研究が非常に少ない「感動」についての研究をアピールすることができた。

2. 他の研究発表

1日目のPre conferenceでは、Emotionに参加した。感情に関して幅広い側面から検討している様々な研究発表を聞くことができ、今後の糧となつた。2日目、3日目には、自分自身のテーマ「感動」に関連するawe(畏敬感情)の発表が、シンポジウム、ポスター共に散見されたため、それらを聞き質問をすることで最新動向を学べた。発表者との議論では初めはやや緊張したものの、次第に緊張は解け積極的に疑問に思っていることを問うことができた。自身の語学力は意識しすぎず、自分の関心ごとや抱いた疑問などを口にすることで、相手も真摯に応えてくれるということを再認識した。同時に、自身の研究についてより議論が深められるように、今後とも語学力をさらに高めることの重要性を心に刻んだ。

今回の学会大会参加及び発表にあたり、国際会議参加旅費補助金をいただき誠にありがとうございました。上記の経験や成果は、今回の参加なくしては得られない貴重なものでした。この大会参加で得たことを今後の研究活動に生かしていく所存です。心より感謝申し上げます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 19日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻
博士後期課程1年

氏 名 金子迪大



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	International Positive Psychology Association 国際ポジティブ心理学会
公式ホームページURL	http://www.ippanetwork.org/
開催期間	2015年 6月 25日～2015年 6月 27日
旅行期間	2015年 6月 24日～2015年 6月 29日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	United States of America, Lake Buena Vista, Disney's Coronado Springs Resort アメリカ、レイクブエナビスタ、ディズニーコロラドスプリングリゾート
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	金子迪大（東洋大学大学院）、堀毛一也（東洋大学）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Testing the effect of explanation needs on duration of affect 感情の長さに対する説明欲求の効果の検討
補助金額	80,000円（内訳 交通費、飛行機代の一部として）＊補助金決定額が申請額より減額となったため変更(10万円→8万円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者の国際学会への旅費等につきまして助成をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。以下、助成金使途、申請者の発表報告、および学会参加における各種発表やディスカッションを通して得られた成果などをご報告申し上げます。

【助成金使途報告】

申請者は6月24日に成田空港を発し、ダラス／フォートワースを経てオーランドへ向かった。また、29日にオーランドを発し、同様にダラス／フォートワースを経由して成田国際空港へ到着した。この間往復の航空券代として81,620円支払った。また、宿泊費として697ドル50セント支払った。補助を受けた8万円はこれらの旅費の一部とした。

【申請者の発表】

申請者は6月27日に“Testing the effect of explanation needs on duration of affect”というタイトルでポスター発表を行った。本研究は、近年研究が始まったばかりと言える感情の持続に関する実証研究である。今回発表したデータは、従来言っていたような「説明／理解感覚の欠如」ではなく「説明欲求(i.e. 知りたい感覚)」がポジティブ感情およびネガティブ感情を持続させることを、調査を用いて実証的に示したものである。これは、感情を well-being の一要素として捉えるポジティブ心理学の国際学会において発表するに値する内容であったと考える。事実、多くの研究者や実践家が申請者の元を訪れ、研究内容について質問を受けるとともに、感情および異なる種類の幸福感を持続させる要因やプロセスについての議論も行われた。

【各種発表による収穫】

本学会にはポジティブ心理学研究をリードしてきた大御所から現在第一線で活躍する若手研究者まで多数参加しており、従来行われてきた研究の最先端の状況のみならず、近年新たに注目を集めている研究についても知ることができた。

例えばPsychological well-being (PWB)の提唱者であるCarol Ryff自らがPWBについての最新の知見を紹介してくれた。発表後のRyffへの質問で、申請者が現在検討しているPWB研究に関する疑問が解消されたことも、意義の大きい成果と言える。

また、特に驚かされたのは、近年の神経生理学的手法の人気に合わせるかのように、幸福感研究でも神経生理学的手法を用いた研究が多数紹介されていた点である。例えば、ポジティブ心理学研究のパイオニアの一人であるBarbara Fredricksonは、幸福にも不幸にも反応する遺伝子の説明を行い、人が置かれた環境によって影響のされ方が異なる事を指摘した。

参加者の中には実践家も多数おり、彼ら／彼女らと共に実践と基礎研究の繋がりを議論できたのは申請者の今後の研究に益するところが多いと考えられる。参加していた実践家の国の多様性にも驚いたが、何より彼ら／彼女らの基礎研究に対する理解の深さに驚かされた。申請者の印象としては、科学的な根拠に基づく実践を心がけている人が多く参加していたようだ。

【最後に】

申請者にとっては2015年2月にロングビーチで行われたSociety for Personality and Social Psychology (SPSP)の年次大会以来2回目の国際学会であったが、申請者の研究領域に合致していたためか、どの時間帯にも興味を惹かれる発表が行われていた。また、申請者は日米通して複数回の学会発表を経験しているが、自身の発表は勿論、私的な議論でもこれまで無いほどの盛り上がりであった。このような機会を与えて下さったこと、心より感謝申し上げます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 8月 18日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

東北大学大学院文学研究科心理学研究室 博士後期課程 1年
氏名 大沼 卓也



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	SSIB2015: the 23rd Annual Meeting of the Society for the Study of Ingestive Behavior (摂食行動学会第 23 回大会)
公式ホームページ URL	http://www.ssib.org/SSIB_2015/
開催期間	2015年 7月 7日 ~ 2015年 7月 11日
旅行期間	2015年 7月 6日 ~ 2015年 7月 12日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Sheraton Denver Downtown, Denver, CO (アメリカ合衆国、コロラド州、デンバー、シェラトンデンバーダウンタウンホテル)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	大沼卓也・坂井信之 東北大学大学院文学研究科
発表題目 ※正式名と日本語訳	Study on the Processing of Binary Odor Mixtures in Rat: Implication for the Complex Food Odor Perception (ラットにおける二要素の混合臭の処理過程：食物の複雑な匂い知覚に関する示唆)
補助金額	80,000 円 (内訳 ホテル宿泊費 112,453 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、SSIB2015への申請者の参加に対し、国際会議等参加旅費補助金をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。以下、本大会での発表概要および成果について報告いたします。

【大会概要】

アメリカはコロラド州デンバーにあるシェラトンホテルにて、2015年7月7日から11日にかけて、SSIB 2015: the 23rd Annual Meeting of the Society for the Study of Ingestive Behavior（摂食行動学会第23回大会）が開催された。参加者のほとんどがアメリカ国内の大学や研究機関、企業に所属する方であり、日本の大学からの参加者は申請者ただ一人であった。摂食行動に関わる多くの研究者が参加しており、専門領域は心理学、神経科学、医学、薬学、栄養学、生物学、工学など、非常に多岐にわたる学際的な大会であった。

【発表概要】

申請者は、開催4日目である7月10日の18時から20時のポスターセッションにおいて、Study on the Processing of Binary Odor Mixtures in Rat: Implication for the Complex Food Odor Perception（ラットにおける二要素の混合臭の処理過程：食物の複雑な匂い知覚に関する示唆）という題目でポスター発表をおこなった。発表の内容は、ラットにおける混合臭の処理様式に関する行動学的な検討であった。食物の匂いのような、複数の匂い要素から構成される混合臭は、一つのまとまった匂いとして全体的に処理されるのが匂い知覚の特徴であるが、二つの要素からなる混合臭であれば、二つの異なる匂いの混合として要素的に処理されると考えられてきた。しかし、高次条件づけパラダイムと味と匂いの学習を組み合わせた本研究により、二つの要素からなる混合臭であっても、一つのまとまった匂いとして全体的に処理される可能性が示唆された。

【成果】

ポスターセッションでは主に、得られた結果の解釈とそれによる結論に対するコメントが多く受けられた。具体的には、実験の結果として得られたラットの行動を、二要素の混合臭が全体的に処理されたと解釈する以外にも、実験手続きや条件づけの方法における問題の結果として解釈することもできるという指摘をいただいた。この点については申請者自身も同意であったため、今後の研究において大いに参考したい。

自らの発表以外にも、シンポジウムや発表セッションに積極的に参加することで、肥満やダイエット、摂食障害など、食行動に関連する近年の問題について、心理学を中心にどのような研究がなされているのかを知ることができ、大変有意義であった。また、アメリカという国柄か、とりわけ肥満に関する研究が非常に多かったことが大変印象的であった。

【最後に】

食と健康の問題は、単に医学や栄養学だけの問題ではなく、行動やその心理メカニズムを扱う心理学の問題でもあることを、本大会への参加により改めて思い知らされました。欧米諸国と同様に、日本においても、生活習慣が遠因である疾患による死亡率が年々増加していますが、それにもかかわらず日本の心理学における食や食行動への関心はまだまだ低いと感じております。これからも、日本の心理学の発展および国民の健康に少しでも寄与できるよう、より一層深く研究活動に取り組んでいく所存です。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 11月 1日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院人間科学研究科・

博士前期課程2年

氏 名

大門 大朗



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	6th Annual Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management 国際総合防災学会 第6回大会
公式ホームページURL	http://www.idrim2015.org/
開催期間	2015年 10月 28日 ~ 2015年 10月 30日
旅行期間	2015年 10月 27日 ~ 2015年 11月 31日 ※申請した期間より短くなっています
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Scope Convention Centre, New Delhi, India ※インド・ニューデリー・スコープコンベンションセンター
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	Hiroaki DAIMON ※大門大朗 (大阪大学 大学院・人間科学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	①Will 'Pay-it-Forward' Network trigger inter-survivor support? ※「被災地のリレー」は被災者間の支援を拡大させるか? ②Altruistic sentiment and volunteering ※利他的感情とボランティア (申請した発表に加えて更に発表しました②)
補助金額	80,000円 (内訳 航空券代・学会費・宿泊費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【概要】

大会名: 6th Annual Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (邦訳「国際総合防災学会 第6回大会」)

日時: 10月27日~30日

場所: Scope Complex, New Delhi

発表内容:

① Parallel Session Four: Young Scientists (10/29)

「Will 'Pay-it-Forward' Network trigger inter-survivor support?」

※邦題「被災地のリレー」は被災者間の支援を拡大させるか?

② Parallel Session Five: Post Disaster Recovery and Management (10/29)

「Altruistic sentiment and volunteering」※邦題「利他的感情とボランティア」

【発表報告】

① Will 'Pay-it-Forward' Network trigger inter-survivor support?

本研究は、日本における災害後のボランティア行動について、「以前被災し助けられた経験」によって次の災害ではボランティアの担い手になるという現象（被災地のリレー、「Pay-it-Forward」Network）に着目し、どのような条件であればボランティアの広がりが見られるかについてシミュレーションを行ったものです。日本における災害研究の蓄積を踏まえ、各災害間の連携について、これまでの「被災者-援助者」の非対称的・二項対立的でないアイデアについて関心を持ってもらう事ができました。また、関心を持っていたいただいたオーディエンスと発表後にネットワークを作ることができました。

② Altruistic sentiment and volunteering

本研究は、災害後のボランティア行動と利他的な感情との関連について、社会調査を下にどのような関連が見られるかについて統計分析を行ったものです。セッションテーマの副題でもある、「岩手県野田村における東日本大震災からの復興」というテーマの中で、自身も含め他の登壇者とフィールド研究について多面的に報告することで、世界各国の研究者により深い被災地の現状と研究成果について共有することができました。

【成果】

・今後のキャリアパスの拡大

受賞だけでなく、終始終了後の博士課程への進学において海外での研究への視野が広がりました。また、実際に留学する際の研究者間のネットワークも、本補助金による支援によって拡大し、様々な選択肢が得られました。

・Young Scientist Award 受賞

発表① “Will 'Pay-it-Forward' Network trigger inter-survivor support?”が評価を受け、全発表中第3位の Bronze Prize を受賞しました。自身にとっての学びだけでなく、日本における災害研究やその蓄積による研究結果が対外的にも評価を受けたという意味で大きな成果となりました。

【謝辞】

本補助金に採択していただいた日本心理学会の関係者の皆様には深くお礼を申し上げます。本補助金の成果として、国内の災害に関する知見を世界に発信するだけでなく、自身の研究に有益なコメント・質問、あるいは、研究上のコネクション、また、様々な最新の知見の拡充を行う事ができました。加えて、当初発表する予定であったテーマに加えて共同研究を進めていた研究に関しても発表する機会を得ることができました。同時に、Young Scientist Award の受賞など、補助金を通じ様々な経験をすることができました。本学会を通じ得られた知見について、今後も学術的・実践的にも還元できるように努めてまいりたいと思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015年 12月 29日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名立教大学大学院現代心理学研究科心理学攻博士課程後期課程3年

氏 名 千葉 元気



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Society for Judgment and Decision Making The 2015 36th Annual Conference 2015年第36回意思決定学会年次大会
公式ホームページURL	http://www.sjdm.org
開催期間	2015年11月20日～2015年11月23日
旅行期間	2015年11月19日～2015年11月24日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hilton Chicago, Chicago, Illinois, USA (アメリカ、イリノイ州、シカゴ、ヒルトンホテルシカゴ)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	千葉 元気（立教大学現代心理学研究科心理学専攻） 都築 誉史（立教大学現代心理学科） 橋口 秀一（立教大学現代心理学研究科心理学専攻）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Eye-tracking Analysis of the Compromise and Attraction Effects in Perceptual Decision Making (知覚的意思決定課題における文脈効果の眼球運動分析)
補助金額	80,000円（内訳渡航費の一部として）

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、Society for Judgment and Decision Making The 2015 36th Annual Conferenceへの参加に当たりまして、日本心理学会より国際会議等参加費補助金をいただきましたことを、心より厚く感謝申し上げます。以下で、学会での活動や参加により得られた成果などについて報告させていただきます。

【活動内容】

報告者らは “Eye-tracking Analysis of the Compromise and Attraction Effects in Perceptual Decision Making (知覚的意思決定課題における文脈効果の眼球運動分析)” という演題でポスター発表を行うため、2015年11月19日から11月24日にかけて、アメリカのイリノイ州、シカゴヒルトンホテルで開催された Society for Judgment and Decision Making The 2015 36th Annual Conferenceに参加した。シカゴは函館と同じ緯度にあり、開催期間中は雪が降り風も強く非常に寒かった。開催日程は例年通り、初日が Reception と Registration、2日目が主に Paper Session、3日目が午前と午後に Poster Session があり、その合間に Paper Session が行われた。最終日は昼頃まで Paper Session が行われた。今年度は、初日に Reception と Registration だけでなく、Paul Slovic のこれまでの研究活動を讃える講演が開催された。この講演では、Daniel Kahneman や John Payne など、意思決定研究の分野において非常に有名な研究者がスピーカーとして参加した。筆者はポスター発表のため参加し、22日午前中の Poster Session にて発表を行った。

【成果】

1. 報告者らの研究発表

報告者らは知覚的意思決定課題における文脈効果 (Context effects) の影響と、その情報探索過程について発表を行った。文脈効果とは、選択環境における選択肢の利用可能性などにより、特定の選択肢への選好が増加する現象である。これまで、文脈効果は主に消費者行動の研究分野で検討されてきたが、近年の研究は、図形の大きさの判断を求める低次な知覚的意思決定課題においても、同様の文脈効果が生じることを示した。しかし、消費者行動研究において確認してきた文脈効果と、知覚的意思決定課題において確認された文脈効果が同様の認知過程を通じ発生するかは検討されていなかった。そこで本研究では、知覚的意思決定課題における文脈効果の認知過程を検討するため、課題中の眼球運動を測定し、共通する要因を情報探索の観点から検討した。結果として、知覚的意思決定課題は課題自体の認知的負荷が低い可能性があり、そのため直観的な認知処理により発生する文脈効果は知覚的意思決定課題において再現され、消費者行動研究で示された情報探索と同様の眼球運動を確認することができた。一方で、熟考的な認知処理により発生する文脈効果は部分的にのみ再現された。

2. 参加した研究発表

多くの発表の中で、報告者らの研究と分野が近く、発展的な研究がいくつか見受けられた。Jennifer Trueblood と Jonathan Pettibone は、知覚的意思決定課題を用い、消費者行動研究で示してきた文脈効果の1つである幻効果 (Phantom effect) について検討した研究発表を行った。この発表では、消費者行動研究で確認された幻効果とは真逆の選択が知覚的意思決定課題においてなされたことが報告された。彼らの研究では the multi-attribute linear ballistic accumulator model をもとに選好形成について論じており、実際の認知過程や情報探索について検討を行っていない。従って今後の研究では、情報探索過程の測定や選好形成時の注意について検討する必要性があると考えた。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。